分家を慣習とする村落における親子二世帯の住まい方に関する研究

—韓国済州島城邑民俗村を調査対象として—

A STUDY ON THE LIVINGSTYLE OF THE YOUNG AND OLD
FAMILY'S DEVIDED LIVING

—In case Seongeup Folk Village in Cheju, Korea—

郭 喜 碩*, 大原一興**, 小滝一正***, 大月敏雄****

HeeSeok KWAK, Kazuoki OHARA, Kazumasa OTAKI

and Toshio OTSUKI

The purpose of this study is to show ways of divided living styles of households with the young and the old in preserved village in Cheju island, Korea and to show problems and prospects of separate condition of residence in Korea. According to the results of this investigation the divided households have modern furniture and utility.

Different generations have enough scope to maintain private daily lives. The point of problem is due to lack of social infrastructure and social circumstances particularly for young people.

keywords : divided living, household with the young and old, dividing house, residence type, living style, Cheju island

分家, 親子二世帯, 分棟家屋, 居住形態, 住まい方, 済州島

1. 研究の背景と目的

近年、韓国では高齢者の平均寿命の延びにより老齢期がますます長期化するなかで、高齢者の居住環境のあり方が問われている。これまでは圧倒的に親子同居形態が多かったが、両世代間の生活スタイルや食事の違い、プライバシーの侵害、それらに伴う精神的ストレスなどが同居居住形態の問題としてあげられている。一方、一人暮らしや高齢者夫婦のみの世帯の場合でも、家屋内事故や緊急時の対応への不安、健康、家事能力、人とのコミュニケーションの面などでさまざまな問題が取り上げられている。

そこで、注目されてきたのが親子二世帯住宅である。欧米では「スーパの冷めない距離」として近居が理想とされている。これについては、日本でも親子二世帯住宅や隣居あるいは隠居などがある。既往研究においても西日本で行われている隠居慣行の親子居住形態に関する研究¹⁾があり、親子二世帯の新たな居住環境のあり方を探っている。

本研究で注目したのは、韓国の済州島に昔からある同一敷地内の隣居である。済州島の隣居は比較的広い敷地内に平屋形式で建てられ、倉庫や牛小屋など農作業場と一体化した完全分離型の二世帯家屋である。韓国では一般的に儒教による伝統的な親子居住形態として同居が主に受けられることが多く、済州島のような隣居居住形態は韓半島本土では見られない。済州島の住居形態はこの地域独特のものであ

り、今も現存する唯一の親子二世帯住宅といつてよい。

出典：南済州郡，城邑民俗村総合整備計画，1994年12月，p. 188. 一部加筆

図1 調査対象地域の現況図

* 横浜国立大学工学部 大学院生・工修

** 横浜国立大学工学部 助教授・工博

*** 横浜国立大学工学部 教授・工博

**** 東京理科大学工学部 専任講師・工博

Graduate Student, Dept. of Architecture, Faculty of Eng., Yokohama National Univ., M. Eng.

Assoc. Prof., Dept. of Architecture, Faculty of Eng., Yokohama National Univ., Dr. Eng.

Prof., Dept. of Architecture, Faculty of Eng., Yokohama National Univ., Dr. Eng.

Lecturer, Dept. of Architecture, Science Univ. of Tokyo, Dr. Eng.

本研究は済州島の居住慣習に注目し、その現況を明らかにしたうえで、隣居型親子二世帯居住の今後の可能性と問題点を探ることを目的とする。

2. 用語の定義と居住形態の分類

分家の住まいの形態、すなわち分家の居住形態を敷地の視点から大きく二つに分類し、同一敷地内で行われる分家と別敷地で行われる分家とする。同一敷地内における分家の居住形態を二つに分け、同棟型と隣居型とする。別敷地の場合は空間と距離の違いにより近居と遠居があるが別居とし、分家を「同棟型」、「隣居型」、「別居型」の3つに分類する。また経済面に関して、対象地域における分家とは両世帯の生計の分離を意味する²⁾。つまり、分家の基本は別食別計と考える。これは対象地域の住民が、「分家は釜分けをすること、すなわち炊事を初めとした生計の分離である」という認識で一致し、本研究においても経済の分離をもって分家と定義することとする³⁾。したがって、同一敷地内の親子二世帯が食事を一緒に取り、家計も同じである同食同計は分家ではなく、同居とし、別食別計が確立されているケースを分家とする。分家の居住形態は以下のように分類される⁴⁾(表1)。

表1 本稿で用いる居住形態

分類	内容
分家	同棟型 同一棟の親子二世帯が別食別計の居住形態
	隣居型 親子二世帯が同一敷地内の別棟で別食別計の居住形態
	別居型 同一敷地外の屋敷に別食別計の居住形態(近居も含む)
同居	同一敷地内の親子二世帯が同食同計の居住形態

3. 調査方法と対象地域の概要

調査方法としては、予備調査により、対象地域において同一敷地内で親子二世帯分家を行っている家屋の概況を把握した。次に本調査で老人会⁵⁾の名簿に基づき対象者を直接訪問し、敷地及び全家屋の平面プラン採取、居住者からのヒアリングによる家屋の利用状況の経年的変化と家族構成などを調べた⁶⁾。全調査数は14事例である(表2)。

済州島城邑村は南済州郡表善面に属し、1961年以後城邑1里と城邑2里に分割されている。本研究では1984年に国家指定重要民俗資料として指定された済州島城邑民俗村、行政地名では、城邑1里を調査対象とした。城邑1里は1998年現在、面積790,747㎡、総世帯数1998年10月現在465世帯で人口は1,462名、老人人口は約118人になっており、総人口に占める高齢化率は8%となっている⁷⁾。

また、城邑1里は、国家指定重要民俗資料に指定され、文化財はもちろん一般家屋の現状変更も許可を受けてから増改築をするよう、許可なしで原形を損傷する増改築はできなくなっている。そのため城邑1里の家屋には済州島伝統家屋の一般的構成と形態が比較的維持され、他村に比べ昔からの伝統的居住形態が残っていると思われる。さらに済州道民俗資料(1987)によると城邑1里家屋の状況は、総家屋数が216、総棟数663棟で、1屋敷地当たり平均3.07棟が配置されているとしており⁸⁾、これは同一敷地内において分家しやすい家屋構造であることが推測される。

4. 調査対象世帯の概要

調査対象世帯14例の内訳は表2の通りである。また、分家を行っている親世帯と子世帯の平均年齢を見ると以下の通りである(表3)。以下のことから配偶者を失ったものや高齢になるほど同居していることが分かる。

表3 対象世帯の平均年齢 (単位:才)

	親世帯		子世帯	
	親夫	親婦	子夫	子婦
分家世帯	70.3	70.5	43.5	40.4
同居世帯	-	83.3	55.3	50

次に分家世帯と同居世帯の炊事形態をみると、分家世帯は8例全てが台所を持っているが、そのうち、子婦が食堂を経営し親婦が手伝っている1例が同食で、7例が別食である。同居世帯の場合は3例

表2 調査対象世帯の概要

居住形態	対象世帯	年齢							職業					居住棟		炊事	家計	洗濯	風呂	法事	現居住形態年数	居住形態の変化（居住年数）										バックリ使用状況			
		老夫	老婦	親夫	親婦	子夫	子婦	子供	老夫	老父	親夫	親婦	子夫	子婦	親世帯							子世帯	同居→同居	同居→隣居	別居→隣居	隣居→別居	同居→同居	同居→隣居	別居→同居	同居→別居	別居→同居				
																							結婚(20)	親高齢(11)	子結婚(4)	家族成長									
同居	S1	-	-	-	93	67	58	-	-	-	-	無	農業	食官	ア	ア	同	同	同	同	ア	20年	3年前子世帯と同居転入										台所		
	S2	-	-	-	69	37	35	1	-	-	-	無	農業	無	同	同	同	同	同	同	-	3年											-		
	S3	-	-	-	88	62	57	-	-	-	-	無	農業	無	バ	バ	同	同	同	同	バ	9年		親高齢(9)			結婚(3)	孫誕生(24)					居住棟		
同棟型分家	H1	-	-	-	80	83	46	42	12	10	-	-	無	農林	管理	同	同	別	別	同	親	3年								転入(2)	家族成長(4)	親高齢(3)	-		
	H2	-	-	-	71	46	42	16	13	-	-	-	無	農業	食官	ア	ア	別	別	同	同	-	15年	結婚と同時に同棟型分家										店舗	
隣居型分家	K1	-	-	-	59	57	32	31	3	1	-	-	-	店従	農業	無	ア	バ	別	別	別	別	ア	2年	孫誕生(8)			子結婚	家族成長(24)			結婚(6)		子世帯居住	
	K2	-	-	-	74	65	39	35	8	-	-	老長	店従	農業	食官	ア	バ	同	別	別	別	-	7年	孫誕生							結婚(2)		子世帯居住・兼店舗		
	K3	-	-	-	80	76	42	38	13	6	-	-	無	農業	店官	ア	バ	別	別	別	別	-	7年	結婚(15)		親高齢(7)	子世帯成長(33)					子世帯居住			
	K4	-	-	-	85	50	48	28	25	-	-	-	無	農業	店従	バ	ア	別	別	別	別	ア	29年	結婚(29)	20年前子世帯の成長によりアンコリ・バックリの住み替えが行われる										親婦居住
	K5	-	-	-	74	-	58	55	-	-	-	無	-	食官	食官	バ	ア	別	別	別	別	バ	20年	結婚と同時に隣居型分家										親夫居住	
	K6	-	77	55	57	35	32	4	2	-	無	農業	店官	店官	ア	バ	別	別	別	同	ア	2年	子結婚(20)		孫結婚(3)	孫と同居(2)	孫家族成長により3世代隣居				子世帯居住				
別居	G	-	-	-	60	58	-	-	-	-	-	農業	農業	-	-	-	-	-	-	-	ア	3年	子供の独立により別居型分家										台所		
	B	-	85	-	-	-	-	-	-	無	-	-	-	-	ア	-	-	-	-	-	-	不明	子供の結婚により別居型分家										-		
夫婦	Y	-	-	-	-	44	39	18	16	-	-	-	-	食官	食官	-	ア	-	-	-	-	13年	母親の死亡により夫婦家族世帯										空き		

凡例 夫婦：夫婦家族、老長：老人会長、食営：食堂経営、食従：食堂従業員、店営：店舗経営、店従：店舗従業員、ア：アンコリ、バ：バッコリ、モ：モッコリ、同棟：同棟型分家、隣居：隣居型分家、
 第1段階 第2段階 第3段階 第4段階 現居住状況

全てが同食である。

分家8例のうち、親世帯と子世帯が共に健在である世帯は7例、同居世帯の場合は1例である。親夫婦が共に健在しているか否かは、親と子の居住形態と密接に関連していることが分かる。

5. 済州島の家屋構成と対象世帯の家屋使用状況

1) 対象地域の家屋構成

済州島の基本的な家屋構成は石垣によって囲われた敷地内にアンコリ（母屋）・バッコリ（副屋）2棟が建ち、それに倉庫やシェマク（牛小屋）など2棟から4棟により構成され、アンコリとバッコリが向かい合う二字型とL字型を基本とし、コ字型、ロ字型の配置がある⁹⁾。中央に農作業など様々な用途で使われるマダン（中庭）がある。その他の残余地はウヨン（畑）として利用されている（図2）。家屋のほと

んどが茅葺きの屋根であり、アンコリ・バッコリの伝統的な済州島建築の三間型の基本間取りは昔と骨格は変わっていない。また、トンシやヌルなどは消滅しつつある。今回、調査対象の家屋ではい

図2 対象地域伝統家屋の家屋配置と外部空間の構成

事例 K1

クドル（オンドル部屋）の使い方

親世帯の場合、クンドルは普段使わなく、客間用と年4回の法事の時に使う。チャグクンドルは、親夫婦の部屋で、夕食後の夫婦団らん・就寝・孫との遊び場などに使われる。また、クンドルの後の部屋は室内倉庫として使われている。子世帯の場合、大部屋と小部屋2室があつて使い分けはしていない。就寝にはベッドのある小部屋を使う場合が多く、2人の子供と遊ぶ時には大部屋を使う場合が多い。

サンパン（板間）の使い方

サンパンは両世帯の特徴がもっともよく表れている空間である。親世帯の場合、電話とミシン台がおりてあり、広めの間取りをしている。来客時最初に迎える場所、簡単な室内作業も行う。この空間が比較的涼しいため夏には就寝場所としても使われる。子世帯は、やや狭いが食事をしたり、室内作業をする。他地域に居住している親世帯の四女が子婦に会いにきてここで話をしたり編み物などをする。台所ともつながっており、床暖房になっているため日中は子婦にとって生活の中心となる空間である。

チョンジ（土床の台所）の使い方

両世帯は別食別計の生活を営んでいるため、チョンジは親婦にとっても子婦にとっても専用の空間である。親世帯の台所は、部屋より大きくテレビもあつてゆつくりと食事ができ、また、親戚が一度に集まる法事の際にも充分対応ができる。

凡例

1. クンドル
2. チャグクンドル
3. サンパン
4. コパン
5. チョンジ
6. 部屋
7. 台所
8. 倉庫
9. 浴室
10. 水台所

事例 K2

クドルの使い方

親世帯の場合、右側の大きい部屋は親夫婦の居室で大型の洋服ダンスとテレビ・鏡台が置かれ、物は少なく整然としていて食事はこの部屋で行う。左側の部屋は普段使わなく物置として利用したり、客や子供たちが来たときだけに使う。子世帯の場合、サンパンの左側に2つの部屋があり、夫婦部屋と子供部屋になっていて、子供の部屋は大型の洋服ダンス・鏡台・本棚・子供用の小さな机と椅子・玩具などが置かれ、子供のあそび部屋になっている。夫婦部屋は、主として4人家族の寝室として使われる。モッコリの老婦の部屋は2年前、倉庫を改築したものである。部屋には、テレビ・タンス2つなど物は少ない。

サンパンの使い方

親世帯の場合、家具はほとんどミシン台だけが置かれている。親世帯の接客場所、簡単な室内作業場として使われる。子世帯の場合は、オンドル床で、大型テレビやテーブル、本棚など多くの家具が置かれ、夕食後4人家族の団らんの場所になり多くの時間をここで過ごす。夏は家族全員の就寝の場としても使われる。

チョンジの使い方

親世帯の場合、大型冷蔵庫や近代的な流し台、食器棚などがあり、食事を親婦がここで作る。バッコリの台所も現代的な流し台が備えられ、電子レンジや大型冷蔵庫、食器棚、食卓と椅子がある。子婦が朝食と夕食を作り、4人家族がここで食事をする。老婦も1人で炊事を行い、部屋にテーブル置き食事をする。親婦の台所も流し台や冷蔵庫があり1人で炊事を行うのに十分な設備が整っている。

図3 隣居型分家世帯の住空間の使い方

図4 対象地域伝統家屋の三間型間取り¹⁰⁾

- 1 クドル 主となるオンドル部屋
- 2 チョンジ 副となるオンドル部屋
- 3 サンパン 棟の中央の板間
- 4 キン 寝物などの収納空間
- 5 チョンジ 土間空間
- 6 クドル オンドルの焚き口空間

れも何らかの改築が行われていた。その内容としては、クルムク（焚き口空間）をなくし部屋を大きくする、薪などによる在来式の床暖房を練炭あるいは石油ボイラーに改造、チョンジ（土床の台所）を現代的な流し台のある台所に改造、アンコリ・バッコリともに正面に風雨のためにサッシをつけるなどである。このようにほとんどの家屋で生活の便利さを追求していることが見られる¹¹⁾。また、子供が結婚し、親子二世帯居住が開始され、従前からのバッコリが老朽化により住みにくくなっている場合はバッコリやそれ以外の棟を居住可能な棟に改築する事例が多く見られる。

2) 対象世帯の家屋使用状況

調査対象の14世帯のうち、11世帯が二世帯居住を行っている。表4は二世帯居住を行っている11世帯の家屋使用状況を示したものである。このうちアンコリだけを所有している世帯が2世帯、アンコリ・バッコリの両方を所有している世帯が9世帯、9世帯のうちモッコリも所有している世帯は5世帯である。アンコリとバッコリを両方所有している9世帯の家屋の使用状況を見てみると、アンコリを居住棟として使っている世帯が8世帯、バッコリを居住棟として使っている世帯が7例である。アンコリ・バッコリの両方を居住棟として使っている世帯が6例である。また、親世帯がアンコリを使っている場合が4世帯、子世帯が使っている場合が2世帯である。つぎに親と子世帯のどちらがバッコリを居住棟として使っているのかを見てみると、親世帯の場合が2例、子世帯4例である。親世帯がアンコリを使っている場合は親がまだ若い、夫婦がともに健在である場合である（事例K1、K2、K3、K6）。それに対して親世帯がバッコリを使っている2事例は、親が高齢で、伴侶がいない場合である（事例K4、K5）。また、バッコリを使っている子世帯の4事例は全家屋で内部改造がなされ、近代的な設備が整っている。モッコリを居住棟として使っている事例は、家族員の増員や成長に応じて、それまで空いていた建物を増改築して居住空間として転用したものである。

表4 家屋の使用状況 (単位: 世帯)

	居住の場合			非居住の場合			
	親世帯	子世帯	同居	台所	空き	店舗	倉庫
アンコリ	4	2	2	1	-	-	-
バッコリ	2	4	1	1	-	1	-
モッコリ	1	1	-	-	1	-	2

6. 分家世帯の住空間の使い方

済州島民家の内部空間をその特徴と機能に応じて大別すると、次の3種に分けることができる。①家族の団らん・接客など社会的空間としての「サンパン（板間）」、②睡眠・休息・学習など私的空間としての「クドル（オンドル部屋）」、③炊事・作業・貯蔵などの機能の保健衛生空間としての「チョンジ（土床の台所）」。

ここでは分家世帯の住生活における住空間の使い方を見ることにする（図3）。

クドルの場合、主に就寝部屋としての使われ方が目立つが、中には食事や夕食後の団らんの場所、子供との遊び場として使われる場合もある。サンパンは、接客の場所と簡単な作業場として使われ、また夏には就寝・食事の場所としての使われ方も見られる。チョンジは、各世帯の女性の専用空間の性格が強いようである。

7. 隣居型分家世帯における日常生活の行動範囲

ここでは、同一敷地内においてマダン（中庭）を介した隣居型分家世帯における両世帯の生活スタイルと生活時間の違いによって両世帯がどのように居住空間を使用しているかを見ることとする。各世帯の生活時間を午前（6～8時）、夕方（18時以降）に分けて各空間の使い方を観察し、それによって両世帯の各空間及び敷地内における日常生活の行動範囲を考察したい。

図5 隣居型分家世帯の日常生活の行動範囲の例

図5は、隣居型分家を行っている6事例のうち、親子二世帯における居住空間の使い方がもっとも典型的と思われた事例K6の親夫（57歳）からの聞き取り調査によって老人世帯・親世帯・子世帯の一日の平均的な過ごし方を朝と夕方以降に分けて表したものである。

この事例から生活スタイルと生活時間の違いによって両世帯の行動範囲が異なっていることが分かる。事例K6のように老婦世帯、親世帯、子世帯ともに朝は起床時間や就労・生活状況の違いによって相手世帯の生活空間への接近は少ない。夕方以降の場合、老婦は孫に会いに子世帯のバッコリに入ったり、親世帯も孫を通してサンパンとモッコリでの交流がある。一方子世帯は、夕方仕事から帰ると浴室やサンパンなどの掃除や洗濯をするため親世帯のアンコリにも入るが、サンパンまでに止まり、寝室や台所までは入らない。夕方以降は、朝とは異なり三世帯の生活行動範囲が全屋敷に渡る。また、相手世帯の居住空間に入る人は、親世帯では、親婦が孫につれられて行く場合が多く、親夫はほとんど行かない。子世帯では、用の有無に関係なく子夫がよく顔を出したり、子婦は掃除やおかずを渡したりなど何らかの用事がある時だけに行く場合が多い。

夕食も三世帯がそれぞれの場所でし、夕食後は居住空間からの移動はあまりなく、それぞれの部屋でテレビを見ながら休む。また孫が親

事例H2 同棟型分家を継続しているケース

事例K1 同居から隣居、別居、再隣居しているケース

事例K6 二世帯隣居から三世帯隣居が行われたケース

図6 家族形態と住まい方の変化

事例G 同居、隣居型分家を経て子供の成長により別居型分家のケース

事例S1 3世代間の隣居、同居、別居のケース

事例S3 同棟分家から隣居、同居が行われたケース

世帯のアンコリにあそびに行ったり、老婦のモッコリに行く以外は変わりなく、親世帯はアンコリで、子世帯はバッコリで、老婦はモッコリで過ごす。

以上K6を例にとって日常生活を朝と夕方以降に分けて見てみたが、各世帯の私生活が確保されていることが分かる。このように各世帯の行動範囲を分離・確保する傾向は他の事例においても同様に見られた。

その他に、調査事例から世帯間の助け合いや交流については、① 食事の分け合い（ほとんどの事例から見られる）、② 洗濯（K1、K2、K6）、③ サンバンやマダンなどの副共有空間の清掃（K1、K2、K6）、④ 孫を介した居住空間の行き来（H1、K1、K6）などが見られた。

8. 家族形態と住まい方の変化

調査対象地域の全事例を見ると老人の居住形態はいろいろなケースが見られ、同居・隣居・近居など時に応じて形を変えていることが分かる。これらの居住形態は結婚や出産、子どもの進学など、家族のライフサイクルの節目を契機に変化している。ここでは家族形態の変化が分家の成立、アンコリとバッコリの住み分けの変化にどのような影響を及ぼすのか、以下に特徴的な事例をあげて考察する（図6参照）。

1) 分家世帯の住まい方の変化

(1) 同棟型分家世帯の変化

事例H2は結婚と同時にアンコリで同棟型分家を開始し、子供の誕生と成長によりモッコリの改築を行い、居住棟に変える。バッコリは土産屋として転用する。

(2) 隣居型分家世帯の変化

事例K1の場合、結婚によるアンコリ・バッコリでの同食同計の同居から別食別計の隣居型分家、子世帯の成長によって別居型分家を経た後、さらに両世帯の住み替えが行われたケースである。また、K6の場合は子供の結婚による隣居型分家、それまで老婦と同居だったのが曾孫の誕生によって倉庫を改築し、老婦と孫世帯との隣居型分家が行われる3世帯隣居型分家のケースである。

(3) 別居型分家世帯の変化

別居居住世帯の事例Gは、60才と58才の夫婦がアンコリで生活している。子供2人は結婚し別居、1人の未婚子は職場のため市内で暮らしているため、かつて子供たちが使っていたバッコリは空いている。アンコリは、サンバンを中央に左右に3つの部屋があって台所はない。バッコリには中央に現代的な台所と左側に部屋1室と右側に倉庫がある。この家屋はアンコリ・バッコリの構成はしているが、台所がバッコリにあってアンコリにはないことと、またバッコリには部屋が1つしかなく、両世帯間の経済的分離を基盤とする二世帯居住には適していないといえよう。

以上の事例から家族形態の変化は分家の居住形態に大きな影響を与え、家族の成長に応じて同居・隣居・別居・再隣居など様々な居住スタイルを変化させていることが分かる。また、この分家の居住形態変遷に関して、上記にあげた事例（図6）から以下のことが言える。

① 分家の契機として、子供や孫の結婚、出産、成長が見られる。② 別居の子供世帯が親の高齢を契機として隣居型分家を開始する場合が見られる。③ 家族員の増減に応じて世帯間のアンコリ・バッコリの住み替えが行われている。④ 倉庫や牛小屋などの付属舎を改築し、居住

室として転用することで家族の増員に対応している。⑤ 老人を中心としてとらえた場合、老人がよそへの移動する負担は少なく、周囲にいる家族の成長を見ながら「住み慣れた場所で住み続ける」ことが可能である。

2) 同居世帯の住まい方の変化

次に現在の同居世帯が、これまで家族形態の変化により住まい方をどのように変化させてきたのか、見てみることにする。

事例S1の場合、親婦の高齢化から家屋の改築による2つだった台所を1つにし、隣居型分家から同居居住に変わっている。また、事例S3の場合、就寝は別棟で行うが、親婦の高齢化により同食同計の居住形態に変わる。2例とも隣居型分家の過程を経て老婦の高齢化に伴い、同居居住形態に変わったことが共通点として表れた。事例から言えることは以下の3点である。① 同居居住までの成り行きとして、分家世帯で見られるように、子供や孫の結婚や出産が契機となっている。② 家族員の増減に応じて世帯間のアンコリ・バッコリの住み替えが行われている。③ 高齢化に伴った同居居住により、それまで使っていた家屋が空き、あいた空間が家族サイクルにあわせて新たな居住空間として利用される可能性が見られる。

3) 核家族世帯の住まい方の変化

最後に現在一世帯で居住している事例Yであるが、家族全員がアンコリで生活している。かつては夫婦と母親がアンコリ・バッコリで隣居型分家を行っていたが、母親の死亡により現在は夫婦世帯だけがアンコリだけを使っている。子供がいずれ成長し、結婚してバッコリでの居住を希望する場合は改築して隣居型分家を行いたいという。この事例は将来子供の成長に応じ、バッコリ改築により親子二世帯居住が可能と予想される事例といえよう。

9. まとめ

分家については、以下のことが分かった。

① 対象地域において分家形態は同棟型・隣居型・別居型が見られた。② 子供や孫の結婚・出産・親の高齢化が分家の契機となる。③ 家族形態の変化や家族の増員に対応するために、敷地内の倉庫や牛小屋などを改築し、居住用に転用していた。④ 隣居型分家は、生活時間や生活スタイルの違いによって私生活空間が保ちやすく、互いのプライバシーが守られる。⑤ 世帯間の助け合いや交流は、食事の分け合い、洗濯、共有空間の清掃、孫を介した居住空間の行き来がある。⑥ 老人のよそへの転居が少なく、周囲にいる家族の成長を見ながら住み慣れた場所で住み続けられるなどである。

次に、分家を経て同居に至っている事例からは以下のことが明らかになった。① 若世代が別居していくことにより高齢者同士の居住となっている。② 配偶者を失った者や高齢になるほど同居居住をしている。③ 隣居から同居への移行により、空いた空間が新たな居住空間として利用される可能性が見られる。④ 隣居型分家をしている場合は、もともと同一敷地内に住んでいるため親の高齢化に柔軟に対応でき、同居居住形態へ移行しやすい。

以上のことから、とくに隣居型分家の長所として、ライフサイクルや時代の変化に対応した家族員の入れ替え、部屋の転用などの可能性が挙げられるが、これらはどの地域でも可能であるとは言えず、敷地の余裕、設備の近代化が可能なことなどが条件として挙げられる。さらに、今回の調査対象地域における問題点としては、若世代の経済的

独立要求に適した職場が居住地の近くにないなど、居住地による限定性などが考えられる。今回の調査地域は、保存地域の特殊な状況であり、今後このような居住形態の他地域等における実情などを勘案し、さらに考察を深めたい。

【謝辞】

本研究は、平成11年度前田記念工学振興財団の助成（代表者：小滝一正、大原一興）によるものである。また、調査にご協力頂いた対象地域の住民の方々に、記して感謝の意を表したい。

註

- 1)参考文献21)～26)参照
- 2)韓国本土では「分家」本来の意味は日本と同様である。ただ、対象地域で意味する分家は本土とは異なり、同一敷地内で親子二世帯が生計を分離する居住慣習であり、地域住民もそういった生計を分離する居住慣習を共通して分家と認識していることから、対象地域で言う分家の概念に倣った。なお船越ら（1998年）は世帯間の生計については言及していないが、距離と空間による親子二世帯の居住形態（同居・隣居・別居）を定義している。
- 3)津波（1990年）は、本土では直系家族中心であるのに対し、済州島では夫婦家族中心であること、本土では同居、同食、同財であるのに対し、済州島では長男夫婦と親夫婦が同じ屋敷内に住んでも棟を分け、食事も別々に行い経済的分離がなされていることが大きな違いであると指摘している。また、津波はこの済州島の家族の慣習がほぼ間違いなく行われ、現在も強い伝統として生きていると述べている。
- 4)同一敷地内の別棟で同食同計の居住形態、別屋敷で同食同計の居住形態は、今回の調査では見られなかった。また調査対象世帯のうち、同食に別計の事例（K2）が見られたが、この場合は同食ではあるが家計を別にし、聞き取り調査により分家しているとの認識があったため分家とした。
- 5)城邑1里老人会は現在会員が約118人（来年約50人新入会）で、入会資格は村内に居住している60歳以上の者となっている。
- 6)調査時期は、予備調査を1999年9月4日から6日、本調査は、同年10月31日から11月6日に行った。また、済州島城邑村は行政区画上、南済州郡表善面に属し、1423年から1914年まで約500年間旌義果庁所在地であり、1961年以降城邑1里と城邑2里に分割され現在に至っている。また、住民の約2割は村内の民芸品屋や土産屋・食堂を営んだり従業員として働いており、約8割はにんじんやミカンの栽培など農業に従事している。住民の家計は農業収入からまかなっており近所の村に比べて豊かな生活をしている。国家指定民俗村の指定後、島外に流出していた若者がUターンして村の人口が増加している。
- 7)村単位の年齢別人口構成の統計資料が公表されていないため、ここでは老人会会員名簿を代用した。また、家族形態については、統計はないが、老人会長によると118人の会員のうち、約85人が一人暮らし、同居が約15人、子供と分家を行っている老人が18人となっていると言う。
- 8)参考文献1)のpp.96～97
- 9)このような家屋構成は韓国本土では見られない。本土では別棟構成ではなく家屋がマダン（中庭）を取り囲むような形で一つにつながっている。なお、城邑民俗マウル総合整備計画（1994）の城邑民俗マウル域内外民家現況表の計266家屋のうちアンコリとパッコリを有する98家屋の家屋配置を調べた結果、L字型が73家屋、二字型21家屋、一字型4家屋であった。
- 10)参考文献2)の趙一訓家屋のアンコリ図より引用。調査対象地域内の国家指定文化財として指定された5軒の古民家の一つである。
- 11)済州道庁の担当者によると、文化財保存に関する規定としては家屋の原型保存が原則となっているが、村の住民に生活上の便宜を図るため古民家（国家指定文化財5軒うち3軒居住、2軒展示用として保存）は原型保存を原則とし、一般家屋に対しては補修の際、屋根は茅葺きに、壁は石積みなどに外形を民俗村の雰囲気合うようにし、内部は現代式に改築することを黙認しているという。
- 12)参考文献1)のpp.63～65より引用、一部加筆。
国家指定重要民俗資料第69号の城邑高平五家屋。

参考文献

- 1)済州道文化広報担当官室編、『済州道民俗資料』，済州道，1987年（韓国語）
- 2)金 鴻植，『韓国の民家』，ハンキル社，1992年（韓国語）
- 3)崔 在錫，『済州島の家族組織』，一志社，1979年（韓国語）
- 4)『韓国の発見—済州道』，＜根の深い木＞社，1983年（韓国語）
- 5)『済州道文化財及び遺跡総合調査報告書』，済州道，1973年（韓国語）
- 6)金 鴻植，『民俗村指定保存対象地域調査報告書』，済州道，1978年（韓国語）
- 7)『城邑民俗マウル総合整備計画』，南済州郡，1994年（韓国語）
- 8)金 正基，金 鴻植他，『城邑民俗村保存及び育成基本計画』，済州道，1980年（韓国語）
- 9)梁 澤訓，「済州道 住居建築의 變遷過程에 關한 調査研究」（済州道住居建築の變遷過程に関する調査研究），漢陽大学，1988年（韓国語）
- 10)梁 澤訓，「済州島 民家の 住生活特性에 關한 建築計劃的 研究」（済州島民家の住生活特性に関する建築計劃的研究），大韓建築学会論文集，1989年8月（韓国語）
- 11)韓 昌榮，「地方自治와 老人福祉에 關한 考察 - 済州道를 中心으로」（地方自治と老人福祉に関する考察—済州道を中心として），社会発展研究，1990年（韓国語）
- 12)泉 靖一，『済州島』，東京大学出版会，1967年
- 13)佐藤 信行，「韓国農村の家族と祭儀」，中根千枝編，『済州島の家族』，東京大学出版会，1973年
- 14)藤島 亥治郎，『済州島の建築（一）・（二）・（四）』，朝鮮と建築，1925年
- 15)樹田 一二，『樹田一二地理学論文集』，弘詢社，1976年
- 16)安 宇植編訳，『新・韓国風土記第一巻 ソウル・釜山・済州島』，読売新聞社，1989年
- 17)ハジソン・ステイ・グループ，「済州島—楽園の分棟住居」，『韓国現代住居学—マダンとパッコリの住様式』，建築知識，1990年
- 18)耽羅研究会編，『座談会 済州島の民家と住まい方』，『済州島第3号』，1990年
- 19)津波 高志，「分棟形態からみた済州島の家族」，『沖縄社会民俗学ノート』，第一書房，1990年
- 20)張 保雄著，佐々木 史郎訳，『韓国の民家』，古今書院，1989年
- 21)青木 正夫，上和田 茂，江上 徹，船越 正啓：親子二世帯住宅の分棟隣居に関する研究，産業経営研究所報，第31号，pp.1～15，九州産業大学産業経営研究所，1999年
- 22)鳥飼 香代子，住田 昌二：創設高齢者同居住宅における親世帯と子世帯の居住分離傾向—地方における高齢者同居世帯の住様式論的研究 その1—，日本建築学会計画系論文集，第468号，pp.121～131，日本建築学会，1995年2月
- 23)鳥飼 香代子，住田 昌二：相続高齢者同居住宅における親世帯と子世帯居住分離傾向—地方における高齢者同居世帯の住様式論的研究 その2—，日本建築学会計画系論文集，第486号，pp.117～127，1996年8月
- 24)鳥飼 香代子，住田 昌二：相続高齢者同居住宅における親世帯と子世帯居住分離傾向（隣居の場合）—地方における高齢者同居世帯の住様式論的研究 その3—，日本建築学会計画系論文集，第513号，pp.93～100，日本建築学会，1998年11月
- 25)船越 正啓，青木 正夫，上和田 茂：居住体験者の相互評価からみた親子二世帯同居と隣居の比較研究，九州産業大学工学部研究報告，第35号，pp.279～286，九州産業大学工学部，1998年12月
- 26)青木 正夫，上和田 茂，船越 正啓：隠居慣行からみた親子二世帯住宅に関する研究 その1～13，學術講演梗概集，日本建築学会，1993～1997年
- 27)畑 聡一，「離島集落における住居及び住居集合の共同性に関する研究 II 部 韓国，台湾における住居の集合性」，博士学位論文，1999年
- 28)佐々木 史郎，「韓国済州島の別棟型民家の成立に関する予察的研究」，歴史地理学171号，1994年12月

（2000年4月28日原稿受理，2000年11月1日採用決定）